



戦国時代の山城

山城とは

- 城郭の本質は軍事施設。
- 天守などの建物を伴わない、土からなる防御施設。
- 全国で3～4万箇所ともいわれる。
- 時代や地域により造り方に傾向（流行）はあるようだが、千差万別。
- 選地は、軍事的に要害の地、交通の要衝、信仰の対象地、山からの眺望などを考慮。

発掘調査の成果が加わり



- 恒常的な居住施設が存在するものもある。
 - 火災の痕跡が非常に少ない。
- …などが明らかになる。

ただし…

- 遺跡に残るのは、最終段階が多く、築城当初や途中経過が分からないことも…
- 発掘調査成果と文献資料などの成果が合わないことも…



『城館調査の手引き』より

発掘調査で見つかる建物・施設

掘立柱建物

【基本構造】

総柱建物：屋内と外回り全てに柱がある建物。

側柱建物：外回りのみに柱がある建物。

→ 廂（ひさし）や縁側を追加する例もある。

→ 中世以降の大きな建物は、総柱（床束）建物が多い。

【用途】

大型は居住。小型は倉庫など。

竪穴建物

【基本構造】

地面を掘り下げて床面をつくった建物。

掘立柱で屋根を支えるが、壁で屋根を支える構造もある。

【用途】

鍛冶工房：金属製品や制作時の残りカスが出土することも。

倉庫：収納品が出土することは少ない。

その他の建物

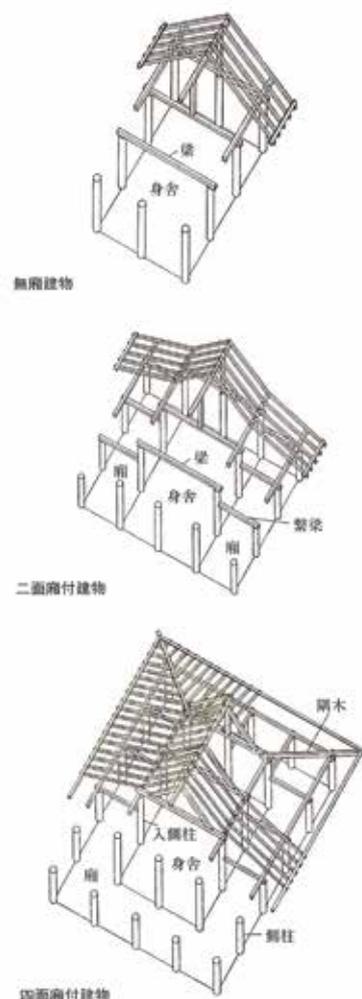
門、櫓、橋、柵：発見された柱穴の配置・大きさから想定。

火薬庫：礫敷、粘土敷から想定。

その他の施設

通路、貯蔵施設、貯水槽、狼煙など

：検出した穴・石の大きさや配置、焼土痕などから想定。



身舎・廂と屋根の構造

『発掘調査のてびき』より

山城の構築物

曲輪・郭（くるわ）

【定義】土塁や堀などの防御施設に囲まれた空間。山城では、山を削平した平坦面も含む。

【形態】

腰曲輪：尾根筋に階段状に配置した曲輪

帯曲輪：頂部の周囲に巡る曲輪

【一口メモ】

- ・近世の城では、本丸・二の丸、三の丸など、丸と呼ぶ。
- ・兵の駐屯地、居所、作業所、儀式などの利用。階段状に配置することで、障壁として役目もあった。

切岸

【定義】山を切って造られた人工的な急斜面。

【一口メモ】

- ・防御施設としてはもっとも普遍的。
- ・曲輪周囲に廻らせ、一体的な造成が多い。

堀

【定義】土を掘って溝とした施設。

【形態】

堀切：尾根を切断し、遮断線とする。

竪堀：曲輪の切岸や斜面地に縦方向に構えた堀。

→竪堀を3本以上連続して設ける堀を畝状竪堀群や畝状空堀群と呼ぶ。

横堀：曲輪を囲い込む線的な堀。

【断面形】

V字形は薬研堀、逆台形は箱堀、中間の箱薬研堀もある。

【堀底施設】

畝堀：障壁（土手・土塁）をもつ。

障子堀：堀底の畝を細分化し障子の棧のような障壁をもつ。

【一口メモ】

- ・横堀は、堀底道として利用されることもある。この移動を封鎖するため、堀底に段や門を設ける堀もある。
- ・障子堀は、小田原北条氏が多用する。
- ・発掘調査では、大溝と堀の区別がつかないこともある。

虎口

【定義】城の出入口。

【形態】

平虎口：直進できる出入口。

喰違虎口：直進を阻止するために虎口両脇の土塁をずらした出入口。

枳形虎口：門の全面や内面に土塁をL字状に構え、直進させずに左右折れさせる出入口。

【一口メモ】

- ・本来、城の出入口は小さく構えたことから小口と呼ばれていた。
- ・戦国時代の山城で枳形虎口が検出されることはほとんどない。

馬出

【定義】虎口の前面に設けられた堀・土塁によって囲まれた小曲輪。

【形態】

丸馬出：形状が半円形。

角馬出：形状が方形。

参考文献

小野正敏・佐藤信・館野和己・田辺征夫編 2007『歴史考古学大辞典』吉川弘文館

独立行政法人奈良文化財研究所 2010・2013『発掘調査のてびき』同成社

中井均 2016『城館調査の手引き』山川出版社

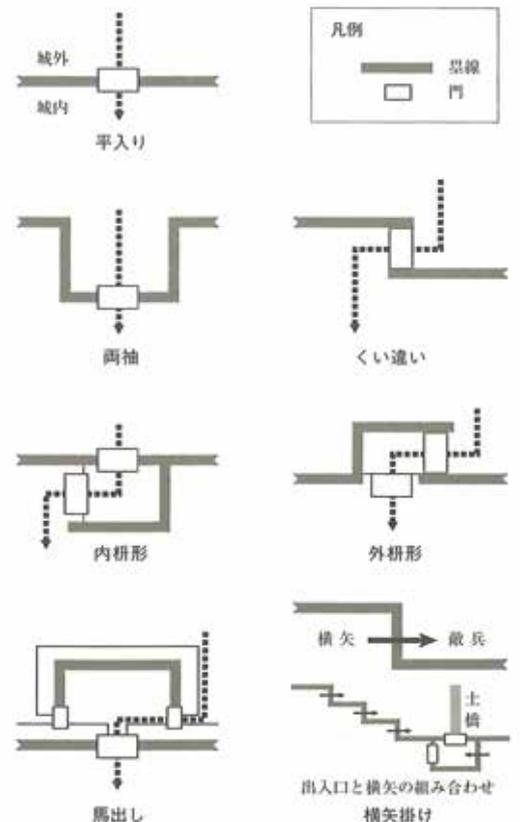
萩原三雄・中井均編 2014『中世城館の考古学』高志書院

土塁

【定義】城や曲輪の縁辺部に設けた防御のための土手。

【一口メモ】

- ・山城では、曲輪を全周する例は少なく、部分的にしか構えられていない。
- ・復元されたイラストでは、土塁の上部に塀や柵が描かれることも多いが、発掘調査で痕跡が発見された例は非常に少ない。



城の出入口の種類

『発掘調査のてびき』より